明治小

主体的に学び、考えを深め合う子の育成

～よりよい対話のある授業を通して～　（３年計画の１年次）

校長　　八嶋　俊次

１　研究主題について

本校では、教育目標に「豊かな心と学ぶ意欲をもち、たくましく生きる子」、努力目標に「よく考え学習する子、思いやりをもつ子、体をきたえる子」を掲げ、教育活動を展開している。また、今年度の学校目標を「主体的に学ぶ子どもの育成」とした。

本校の児童は、明るく素直で、学習意欲の高い児童が多く、与えられた課題や指示されたことには前向きに取り組んでいる。一方、基礎学力の個人差が大きいことや話を正しく聞き取る力、話す力が不足している点、また、児童の主体性が十分ではない点に課題がある。そこで、児童が学び方を身に付け、人とつながりながら協働的に学ぶ授業づくりを研究していく必要があると考えた。

昨年度までは、問題解決の場において児童の思考や言語活動を促すための発問や板書を工夫し、ともに深め合う力を育てる学習指導の充実・改善を図ってきた。それにより、話合いの過程で自らの学びを見つめ直し、修正したり新たな考えを発見したりすることが、ともに深め合う力の育成につながることが分かった。しかし、目指す児童の姿である主体的対話的な関わり合いが十分になされず、一部の児童の対話で完結してしまい、うまく周囲とつながれないまま授業時間を終えてしまった子がいることや受け身に偏りがちでアウトプットできない児童がいたことも事実である。

そこで、今年度は昨年度までの研究の成果の上に、協働的学びの実現に向け、よりよい対話のある授業を通して、主体的に学び考えを深め合う子の育成を図っていくこととした。授業の中で学び方を駆使しながら、友達や教師とつながる中で個々の児童が考えを深めていくことができるような授業づくりを進めていきたい。教科としては、国語、社会、理科、算数、生活に広げて研究することとした。

２　研究のねらい

児童の「考えを深め合う力」を育てるための効果的な指導の工夫を授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

問題・教材との対話、他者との対話、自分との対話のある授業をすることにより、児童の「考えを深め合う力」を育むことができる。

４　研究内容

(1) 知的好奇心を高め、思考が動き出す動機づけから、問いを共有する場へつなげる工夫をする
　（問題・教材との対話）
(2) 学習方略を身につけさせるための単元構成や展開の工夫（他者との対話・自分との対話）
(3) 振り返りの設定（自分との対話）

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等	概要
6	２２	４学年授業研究 電流のはたらき 授業者　大嶌　禎子	車を後退させる失敗を演示し、「回路の中はどうなっていたのか」」という発問をすることにより、図を介した対話を促すことができた。

6	２９	いちょう学級公開授業 ルールを守って楽しく活動しよう 授業者　大下　陽子	ルールを守らない例を挙げ「どんなことを守ったら楽しくできるか」という発問をすることにより、お互いを認め合う対話を促すことができた。
9	２８	５学年公開授業 ふりこのきまり 授業者　井畑　八千代	ブランコの動画を見て、「揺れ方がちがうのは何と関係しているのか」と発問することにより、経験をもとに考え、図や絵を介した対話を促すことができた。
9	２９	３学年公開授業 重さ 授業者　中村　好秀	シーソーの絵を提示し、「一番重いわけを説明できるか」と発問することにより、絵カードに書いたコメントをもとに順序立てて説明し合わせることができた。
１１	2	２学年授業研究 三角形と四角形 授業者　下館　眞梨	図形の見せ方や順序を工夫して提示し、「三角形や四角形と言えるわけを説明する」という課題を設定することにより、図やメモを介した対話を促すことができた。
１１	9	１学年公開授業 かたちづくり 授業者　沼舘　優子	色板の数を指定した上で「影絵の形を作ろう」という課題を設定することにより、具体物を操作しながらの対話を促すことができた。
１１	２４	６学年授業研究 てこのはたらき 授業者　田村　享太	ドライバーがてこを利用しているという事実を提示し、「どのようなてこの仕組みになっているか」と発問することにより、書き込みを介した対話を促すことができた。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
5	１８	「学習方略とは何か　なぜ大切なのか」 講師：広島大学大学院准教授　深谷達史先生
6	１５	「地域を学ぶ」　　講師：北山博秋氏
7	２９	ICT 活用　立命館小学校教諭　正頭英和先生（視聴覚教育研究会夏期講習会講師）
8	２２	ストレスマネジメント～ストレスとうまくつき合う方法～ 講師：青森県総合学校教育センター　教育相談課　工藤直子先生
１１	9	問題解決的学習における学習方略の効果的な活用について 講師：広島大学大学院准教授　深谷達史先生
1	１０	JS 講演　「いじめ・不登校の根っこにあるもの」　SC　北山勝則先生

６　研究の成果

(1) 知的好奇心を高め、思考が動き出す動機づけとして、児童の興味関心を引くもの、ある程度の抵抗感があるものを提示することによって、「主体的に学ぶ」意欲の高まりが見られた。また、児童のつぶやきを丁寧に拾うことで、問いの共有につながることが分かった。

(2) 学習内容、学習活動に適した学習方略を活用させたり、個人、グループ、全体と段階を踏ませたりしながら自分や他者との対話を促すことにより、考えを深め合うことになると分かった。

７　研究の課題

(1) 問題・教材との対話をさせるのに、何を提示して、何を考えさせるか、また全体の場でどのように考えを共有させるかについてさらに研究を深めていく必要がある。

(2) 学習方略を可視化したり、学習方略の有効性を実感させたりする授業づくりを通して、児童自身が学習方略を活用する力を育成したい。

（記入者　大嶌　禎子）